北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 10, 23-37, 2012.

渡島半島東岸部の漁業関係の語彙*

橋本　邦彦

The Fishery-related Vocabulary in the Eastern Coastal Region of the Oshima Peninsula

Kunihiko HASHIMOTO

Abstract: The purpose of this article is to present the fishery-related vocabulary which has been collected by our fieldwork, on the Internet and through several documents, accompanied by the dialectal words, the corresponding forms in the standard Japanese language, the meanings with brief comments and the examples in use. It primarily includes the names of fishing boats/ships, tools and methods used in the eastern costal region of the Oshima Peninsula. The research will lead us to the fact that the vocabulary is closely related to the way of local fishing.

キーワード：漁業関連語彙　漁船　漁具　漁法　方言

1. はじめに

2000 年から 2011 年までに椴法華村（現在函館市）で実施された実地調査は計 11 回を数える。この間、6 名の地元在住の方々の真摯な協力により、方言並びに地域に関連した事柄について貴重な証言と資料を得ることができた。最新の調査（2011 年 9 月 7 日～9 日実施）で痛感したのは、時間の経過と共に調査協力者の高齢化が進み、入院や物故のためにインタビューが不可能になりつつあるという現実であった。また、函館市に編入された後（2004 年 12 月）、文化的にも意識的にも平準化が驚くほどのペースで進み、この地域の特有性が消えつつあると言わざるを得ない。

椴法華村は、図 1 に見るように、渡島半島最東端、恵山（618m）の北東部に位置している。西南に海向山（570m）、北西に丸山（691m）が相対し、北西は南茅部町、南は恵山町が隣接している [1)]。三方山に囲まれ、唯一の開口部が太平洋という閉じられた地域である。実際に、1933 年の函館と椴法華間は自動車道路が開通するまで、交通手段は海路のみであったし、南茅部と接する銚子岬側にトンネル（国道 278 号線銚子トンネル）が開通するのは、やっと 1974 年になってからである。こうした地理的な閉鎖性に着目して、方言や風習に特有性が保持されているのではないかという予測の下に研究プロジェクトが開始されたのである [2)]。

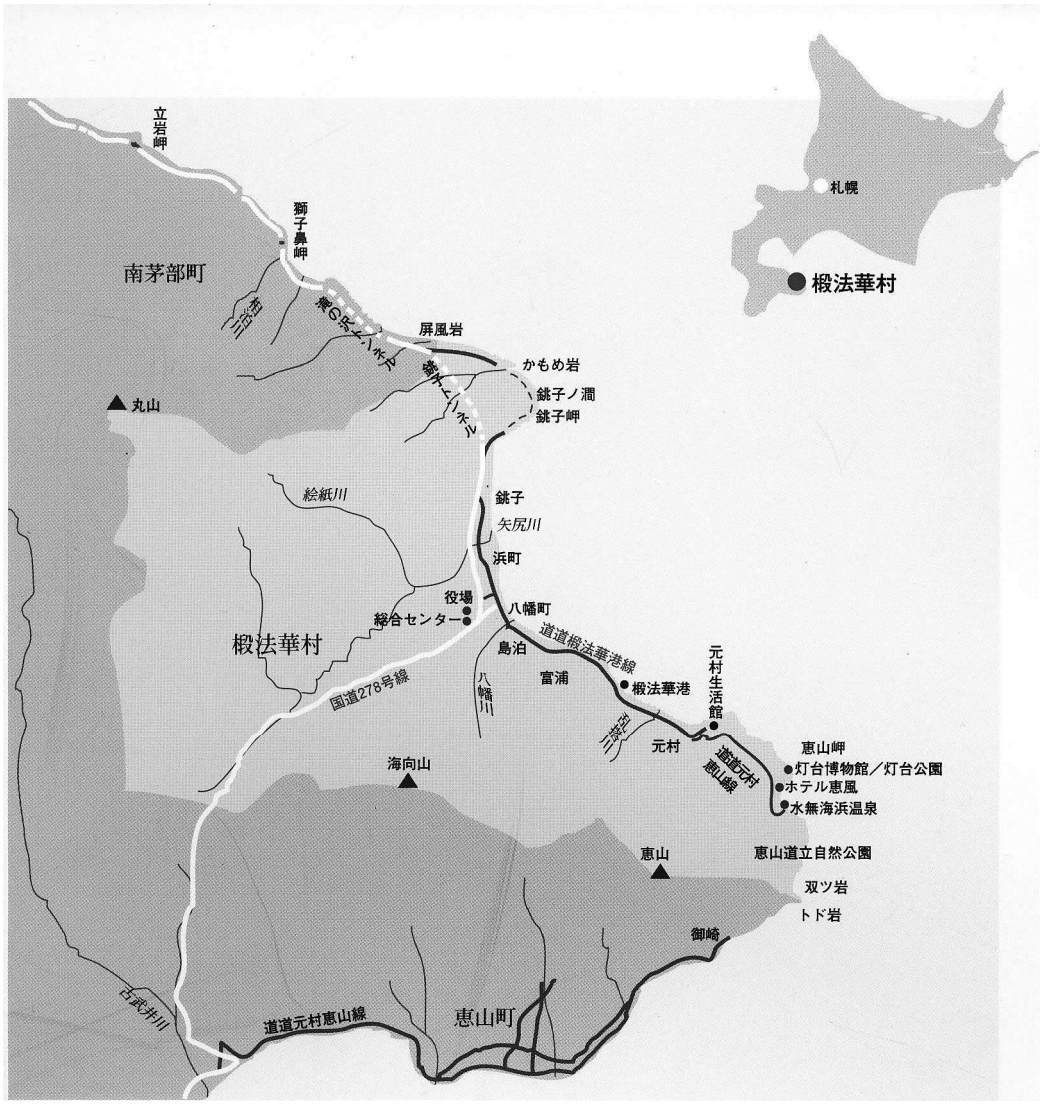


図 1：『椴法華村勢要覧'99』より引用

椴法華村は山の多い土地であるため農業は振るわず、明治から今日に至るまで基幹産業は漁業であった。恵山沖は豊かな魚田として知られ（椴法華村史 1989: 229）、夏・秋のイワシ漁、夏のイカ漁、冬のタラ漁に加えて、沿岸部ではコンブ漁が盛んに行われてきた。その他に、ホッケ、ブリ、タコなども漁獲される。この地域が松前町を含む日本海側の渡島半島西岸部と決定的に異なるのは、ニシン漁が盛んではないということである。このことから、東岸部と西岸部の漁具・漁法に関連した語彙に違いのあることが予想される。

言葉に目を転ずると、石垣（1980）は北海道方言を次のように分類している。

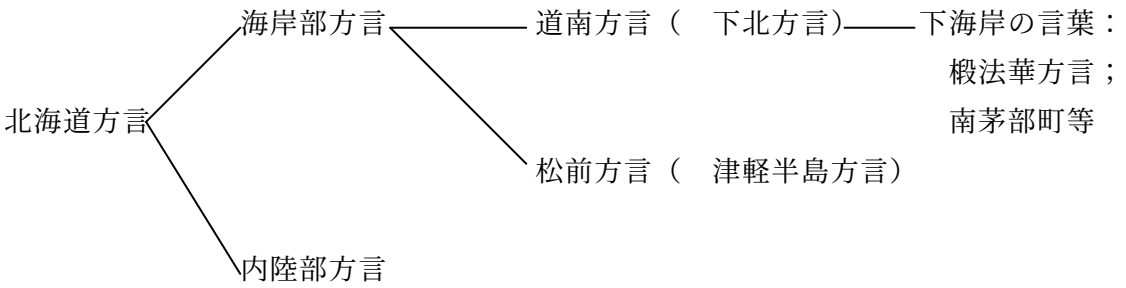


表 1：北海道方言の分類

『北海道のことば』（1999: 9）によると、海岸部方言は室町時代以降の主として青森、秋田などの東北北奥地方の方言に由来する。この方言が松前を含む道南地方の沿岸部一帯に広がり、アイヌ語との接触を経験しながら、北海道方言の母体を形成していったのである。椴法華方言は下（しも）海岸 [3]の言葉を中核として、津軽海峡を隔てた対岸の青森県下北半島方言の要素を濃厚に反映していると言われている。隣接する恵山町、南茅部町の方言とほとんど差異はない（『北海道のことば』(1999: 109)）。一方、内陸部方言は、明治以降、様々な地域から移住してきた和人たちがそれぞれの方言を持ち込むことによって生じた。その後の交通や産業の発達、行政の組織・運営の整備などによって人々の交流が活発になるにつれて、これら二つの方言は互いに接触し影響を与え合って、今日の形の北海道方言を成立させていったのである。

本調査研究の焦点は、椴法華を中心とする渡島半島東岸部地方の漁業の特色と表 1 に挙げた方言の位置づけの交差するところに置かれる。この部分においてこそ、渡島半島東岸部の漁業に関連した語彙の特徴が顕著に現れると考えられるからである。

第 2 節では漁船関係の語彙を、第 3 節では漁具・漁法関係の語彙を、各々解説と用法を付して示したい。第 4 節の結びでは、今後の調査研究の方向性と展望に言及する。

2. 漁船関係の語彙

漁船関係の語彙は、船舶そのものの名称とその部位および付属品の名称とに分かれる。

2.1. 船舶の名称

漁船の名称は、次の通りである。

(1) エソブネ：いそぶね、磯船：長さ 6〜8m、幅 1.3m前後、高さ 0.5〜0.7mの手漕ぎの船（無動力船）。櫓を用いて操船する。3，4 人が乗った [4]。

☛「エソブネデ　アリタモンダ（磯船で　行ったものだ）」
「テデコエデ　アリガネバネモンダモノ（手で漕いで　行かなければならないもんだものねえ）」
「フタリデノー　タエガエ　サンニンガヨッタリ　ノッタモンダ　エソブネサノ（2 人でねえ　大概　3 人か 4 人が　乗ったもんだ　磯船にね）」
＜石垣（1980: 58）＞

(2) ドンブネ：どうぶね、胴（海）船：長さ 14～16mの無動力の魚見船。船首のとがった中国船に似たような船。この船で 1,500mの沖に網を伸ばして 3～6 時間かけて網を引っ張った。

☛船首に船頭が立ち、魚群の行動を探索し魚群を発見するやマネを上げ（旗や松明を利用した合図）、直ちに網を拭廻す。

＜椴法華村史（1989: 127）の明治 21 年のイワシ漁から引用＞

(3) ナガブネ：なかぶね、仲船：長さ 1m、幅 2m程度の無動力の船。

☛『函館市史（デジタル版）』「表 2－83　函館港の木造船（大正後期～昭和初期）」によると全長 9.8～10.3mと記されてあるが、石垣（1980: 71）の大正 9 年生れの漁師の子供時代の思い出には「小舟」として証言されている。

(4) モヂップ：もちぶせん、持府船：長さ 17m、幅 2m位の大船で、ガスやカーバイトを使用していた。

☛『椴法華村史』（1989: 94）によると、明治 10 年のセイウチの輸送で用いられている。なお、明治 13 年の椴法華村の漁船数は総数 105 艘のうち、筒船（20 石積）4 艘、持府船 17 艘、磯船 84 艘となっている。

＜椴法華村史（1989: 104）＞

(5) カワサギ：かわさきぶね、川崎船 [5]：全長 10～13m。一般に、5 反の帆に 6 丁の櫓を使用する無動力船。タラ漁やイカ漁に用いられた。

☛「オラエデ　シカベカラ　カワサギ　カテキタノセー。アノアダリ　カワサギー　ホトンドダモノー。…ホカゲデノー　ロオシテセー。（私の家で　鹿部から　川崎船を買ってきたのさ。あの頃（昭和 5 年前後）　川崎船が　ほとんどだものね。…帆をかけてねえ　櫓を押してさ。）」

＜石垣 1980: 67＞

☛「カンゼネバ　コンダ　ホカゲデ　エガレネモンダカラ　オドナノスト　コンダロオスベサ。（風がないと　今度　帆をかけて　いかれないものだから　大人の人が　今度は　櫓を押すだろうさ。）」

＜石垣 1980: 68＞

☛『新高島町史（デジタル版）』p136 によると、「（川崎船は）江戸時代に北陸から東北にかけ、タラ、ニシンなどの沖合漁業に使われた。当時としては比較的大型の漁船で、明治時代に帆装も様式化、廻船（海上の運送）としても使用された。明治中期に新潟県からの移住者によって北海道に導入されたが、帆、櫓、櫂で操る無動力船で、エンジン船の普及にともない姿を消していった。」

(6) チャッカ：チャッカー、着火船：2.5～12 馬力の電気着火式石油機関搭載の動力船。和船で、沿岸漁業に用いられた。

☛「（昭和初期には）チャッカテエノア　エッケンガ　ニケンシカ　ナガッタノセ。（チャッカーというのは　1 軒か　2 軒しか　（持って）なかったのさ。）」

＜石垣 1980: 67＞

(7) ヤギダマ（エンジン）：ヤキダマ（エンジン）、焼玉（エンジン）：5〜10 トン、5〜15 馬力の焼玉機関搭載の和洋折衷型の動力船で、大正後期から昭和前期にかけて沿岸漁業で使われた。バーナーで焼玉を赤くなるまでふかしてエンジンをかける。

☛「ヤキダマダカラー　バーナーデヤキダマフカシテ。ソシテー　アカグナレバー　アカグナルマデ　フカスンダ。ソイデ　フカシテ　コンダー　ウエカラ　ノズルデー　アブラデテイグー　ノズルツッコンデー　シメデー。(焼玉だから　バーナーで焼玉をふかして。そして　赤くなれば　赤くなるまで　ふかすんだ。それで　ふかして　今度は　上から　ノズルで　油が出ていく　ノズルを突っ込んで　締めて。)」

「ソイデ　ソレコサ　コンドツカマエデ　コーヤッテ　フッテー　ポントカカレバハナシテ　カカルマデ　フッテヨルンダーナ。(それで　それこそ　今度(ノズルを）つかまえて　こうやって　振って　ポンと（エンジンが）かかれば　放してかかるまで　振っているんだな。)」

「トージワ　バリキニスレバノー　ゴバリキ　ゴバリキナンデスヨ　ヤキダマダカラノー。(当時は　馬力にすればねえ　5 馬力、5 馬力なんですよ　焼玉だからねえ。)」

＜橋本・島田・塩谷 2011＞

☛「ヤギダマジダイニナッテ　センソマエトガ　センソ　スギデカラ　ヤギダマノ　ジューゴバリキトガ　ジューバリキトガ　アルベセー。((船が）焼玉エンジンの時代になって　戦争前とか　戦争　過ぎてから　焼玉の 15 馬力とか　10 馬力とかあるんだろうさ。)」

＜石垣　1980: 63＞

(8) ハツドーキ：ハツドーキ、発動機船：10〜20 トン、15〜25 馬力の焼玉機関搭載の洋型船で、沿岸漁業に用いられた。ただし、20〜40 トン、30〜50 馬力の大型のものは、北洋漁業の独航船として活躍した。

☛「エソブネガラ　カワサギサ　カワッテー　カワサギガラ　コンダ　ハツドーキサカワッタンダ。セバ　マルゴノ　トサンダヂワ　ジダイワ　カワサギ　ハツドーキノジダイガ（磯船から　川崎船に　変わって　川崎船から　今度は　発動機船に　変わったんだ。そうなら　まる五（屋号）の父さんたちは　時代は（終戦後あたり）　川崎船　発動機の時代か。)」

＜石垣 1980: 68＞

漁船の変遷については、石垣（1980）の聞き取り調査に興味深い証言が載っている。明治 34 年、大正 9 年、昭和 17 年にそれぞれ生まれた 3 人の漁師に、昔の漁の様子を語ってもらっている箇所で、明治生まれは磯船を、大正生まれは川崎船を、そして昭和生まれは焼玉エンジン搭載の発動機船を、主に使用した漁船として挙げている。現在は、100%ディーゼル船である。ただし、3 つのタイプの漁船の使用時代は重なっていて、椴法華村ではかなり下っ

た時代でも、磯船や川崎船などの無動力船に頼っていた。たとえば、昭和 8 年 3 月 3 日に東北・北海道を襲った地震により発生した津波で、15 隻の磯船が流失したことが記録されている（椴法華村史 1989: 225)。また、川崎船は明治 22 年 3 月の日本海側古平におけるタラ漁から使用され、さらに明治 27 年 4 月 15 日付けで北海道庁考案の普通タラ漁用改良川崎船が竣工されたにもかかわらず、椴法華村を含む下海岸地域で一般化するのは、ようやく大正の後期になってからである（椴法華村史 1989: 129, 138, 225)。磯船も川崎船も無動力船であることに変わりはないが、前者が小型で専ら手漕ぎのみであったのに比べ、後者は少し大型になり、帆を張っての風の力を動力に組み入れることができるようになった点が異なる。参考に磯船（写真１）と川崎船（写真２）の全景、及び焼玉エンジン（写真 3）を、次に掲げる。



写真 1：磯船（みちのく北方漁船博物館所蔵）[6)]

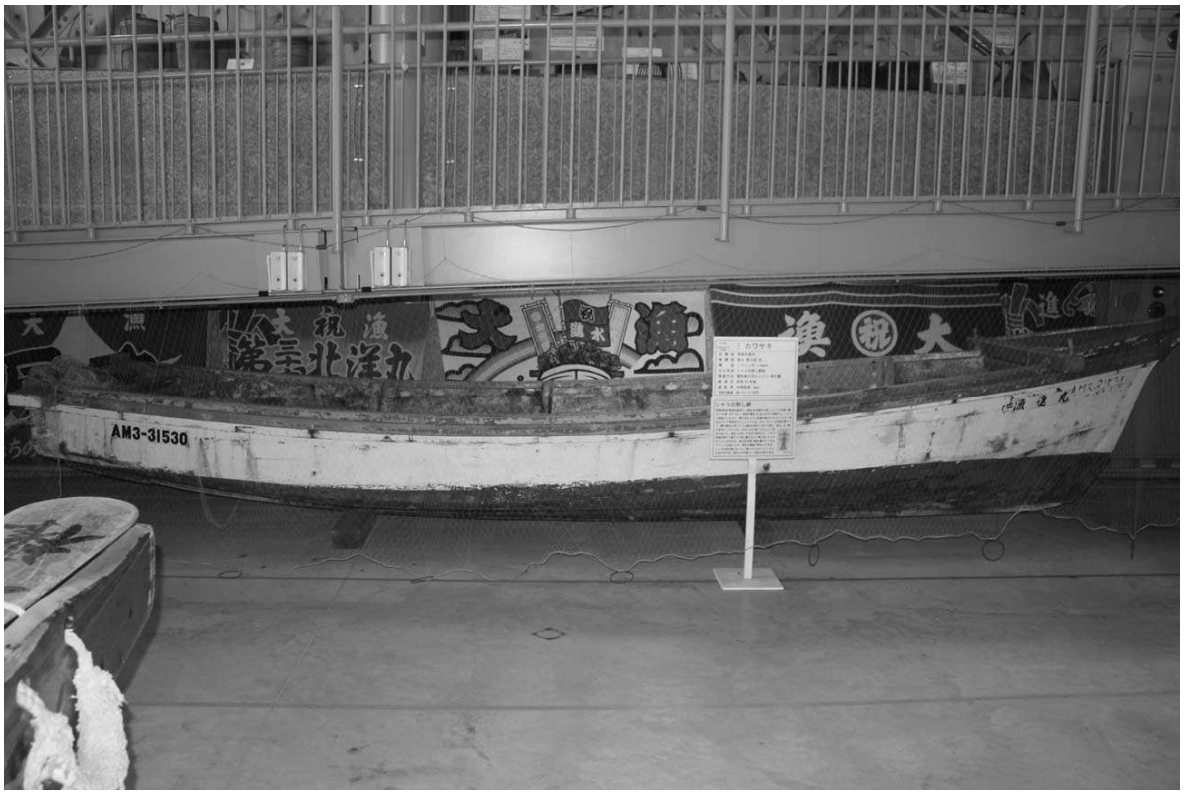


写真 2：川崎船（みちのく北方漁船博物館所蔵）

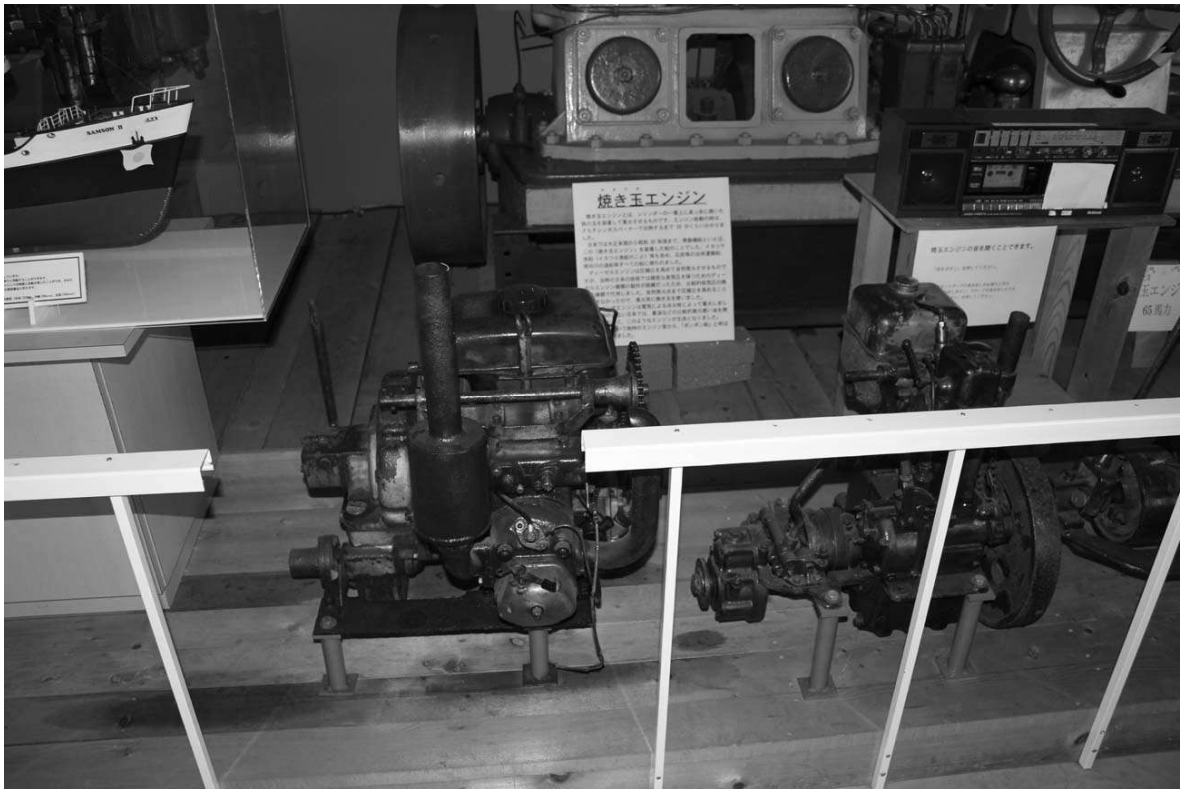


写真 3：焼玉エンジン（みちのく北方漁船博物館所蔵）

福井県、新潟県などの北陸地方では、大正時代にすでに発動機船で遠く恵山沖まで赴き、

イカ釣りに従事していたのに対し、椴法華村で動力船が普及し始めるのは、ようやく昭和 10 年代に入ってからである。この船が焼玉エンジンを搭載した小型発動機船である。

焼玉エンジンは馬力があまり出ないので専ら沿岸漁業用であったが、橋本・島田・塩谷（2011）での元漁師からの聞き取り調査によると、昭和 15，6 年頃に 5 馬力の焼玉エンジン漁船を駆って、函館、釧路、根室経由で国後島から択捉島までタラ漁の出稼ぎに出かけていたようである。一方、洋船型の 20〜40 トン、30〜50 馬力の焼玉エンジンの比較的大型の発動機船は、昭和初期に函館市を拠点とする日魯漁業 [7]の北洋漁業独航船として活躍した。このように、椴法華村では漁船の変遷が、北陸地方や渡島半島西岸部と比較して、遅く推移していることがわかる。

2.2. 船舶部位の名称

船舶部位の名称については、現段階で 3 つしか収集できていない。

(9) ハナヘ：船首

(10) サッカイ：くるまかじ、車櫂：磯船を漕ぐ際に使用された櫂

☛「オモニ　ロー　エッチョーダノ。サッカイ　タデデノ。サッカイテ　クルマカ゜イタデデ　フタリデノー。タエガエ　サンニンガ　ヨッタリ　ノッタモンダ　エソブネサノ。(主に　魯が　一丁だね。サッカイを立ててね。サッカイっていう　車櫂を立てて　二人でねえ。大概　三人か　四人で　乗ったもんだ　磯船にね。)」[8]

＜石垣　1989: 58＞

(11) フネ：舷側：船の横側

☛「ヤギダマジダイニナッテ…フネタゲグナッタベセ。ヤマデデワ　ハカドネ　ワゲセノー。ハリニホン　マ　サンボン　ツケダノモ　アッタドモ　トゴロカ゜　ハネコ゜ワ　ソノー　フネ　タケ゜クテモ　サオナケドゴデ　ハカドッタワゲセノー。ダカラジダイニヨッテ　マダ　ホレ　ギョホーモ　カワテクルシ　ハカドルシコ゜ド　アッタノセー。((船が）焼玉エンジンの時代になって…船の（舷側が）高くなったでしょ。ヤマデでは　はかどらない　わけさね。　針を二本　ま　三本　つけたものも　あったけれど　ところが　ハネゴは　そのう　船（舷側）が　高くても竿が長いので　はかどったわけさねえ。だから　時代によって　また　ほれ　漁法も　変わってくるし　はかどる仕事が　あったのさねえ。)」

＜石垣: 1980: 63＞

(11)は全体で部分を表すメトニミー的用法である。大正 9 年生まれの漁師のイカ釣りについての語りから、使用する船の形によって、漁具や漁法が変わっていった様子が窺える。焼玉船の導入によって、従来のヤマデでは作業がはかどらなくなったのに対し、ハネゴは舷側が高くなっても付ける竿が長いので作業がはかどったというのである。

参考資料として、和船の部位を図 2 に示す。

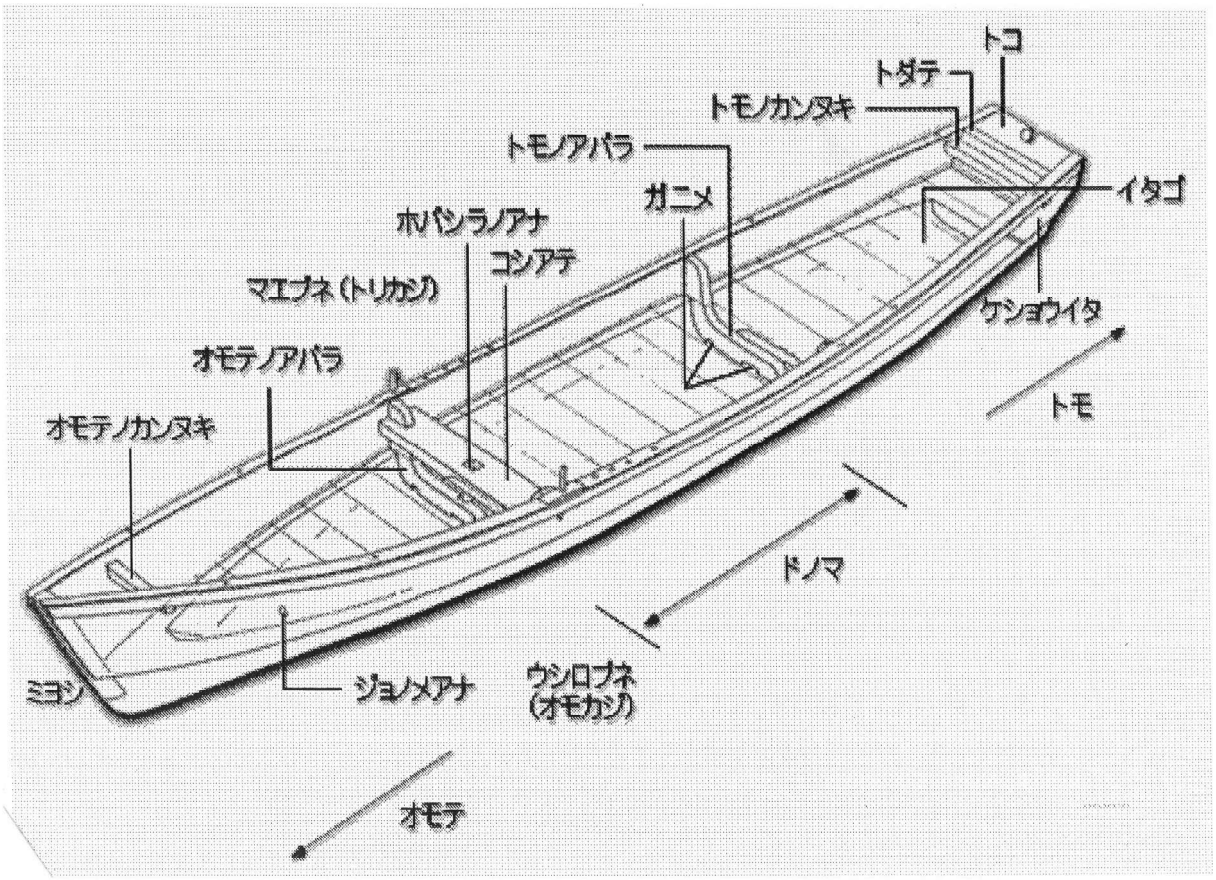


図 2：和船の部位名 [9)]

3. 漁具・漁法関係の語彙

漁獲される魚種は、漁具や漁法と密接に関係する。渡島半島東岸部では、イカ、タラ、イワシ、それにコンブが主に獲れる。特に、椴法華村ではイカ漁は全漁獲高の中で最も大きな部分を占めている。それゆえ、イカ漁に関連した語彙は豊富である。

3.1 イカ釣り用の漁具・漁法関係の語彙

実地調査と文献から収集し得た語彙を、以下に挙げる。

(18) エガツケ：イカつけ、イカ釣り：昭和 30 年頃までの漁法で、餌は用いず、ハネコ゜、ヤマデなどの漁具を上下させて、その先端に付けたカキ゜バリにかかったイカを獲る。

☛「シモカイカ゜ンダラ　シモカイカ゜ンデネバノー　コノスルメエガテノー　トレネアカ゜ンナガッタンダカラ。…ホッカイドデモネ　シママギホーメンノシトダトガミンナ　コゴエキテ　エガツケニ　キタモンダ。(下海岸なら　下海岸でなければねえ　このスルメイカっていうのは　獲れない　あがらなかったんだから。…北海道でもね　島牧方面の人だとか　みんな　ここに来て　イカつりに　来たもんだ。)」

＜石垣 1980: 76＞

(19) ハネコ゜：はねご：片側 2 本ずつ、計 4 本の針が付いている。これを用いてイカを 2 尾ずつあげる。

(20) ヤマデ：やまで：磯船でイカを獲るときの道具。針が 2 本付いている。ハネコ゜と比べると、作業が簡単にはかどると言われている。

☛「ヤマデコシテ　ヤルカラ　ヨンシャクグライノモンダノー。ソレデネー　ヤマデツカンデノー　ナンノワゲネ。コー　テク゜スデモッテ　コイデノー　ツッタモンダ。（ヤマデをこうして　やるから　4 尺位のものだねえ。それでねえ　ヤマデを握ってねえ　なんのわけもない。こうテグスでもって　漕いでねえ　釣ったもんだ。）」

☛「ハネコ゜　ハネコ゜テケドモ　ハネコ゜シカモ　ハガドッタンタッツモノー　ニホンデ　ヤッテノー。（ハネゴ　ハネゴというけれども　ハネゴよりも　（ヤマデの方が）はかどるんだってもねえ　2 本でやってねえ。）」

＜石垣 1980: 61＞

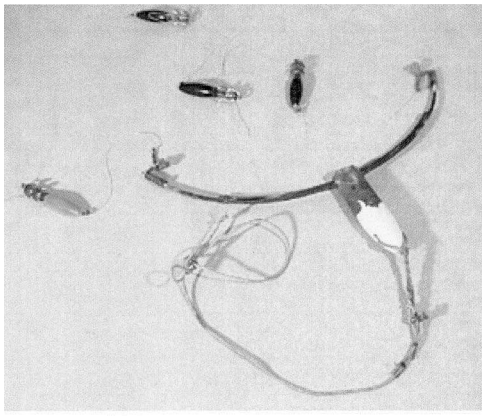


写真 4：ヤマデ

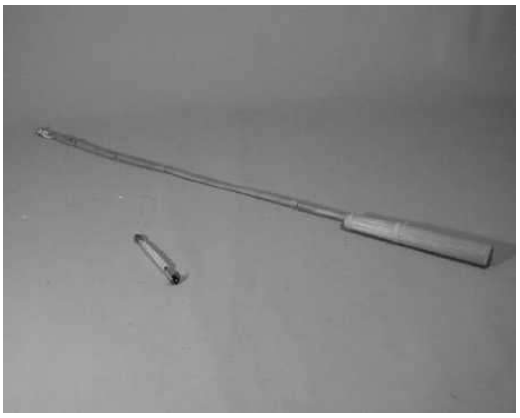


写真 5：ハネゴ（1 本型）

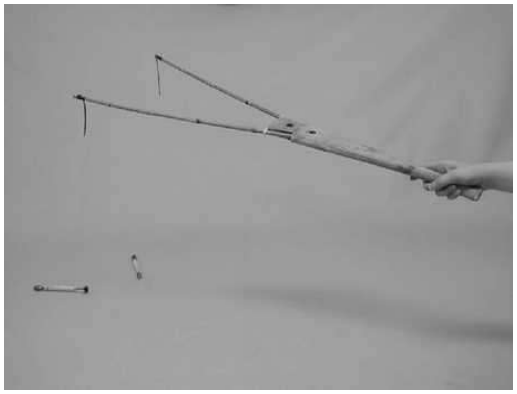


写真 6：ハネゴ（二股型）

（以上 3 点とも東北歴史博物館所蔵）[10)]

(21) カキ゜バリ：かぎ針：ハネゴやヤマデの先端に付ける針。これにかかったイカを獲る。

(22) ソエマギ：そえ巻き：イカ釣りの針で、針先以外の部分を綿糸で巻いてあるもの。これに針を 2 本付けた。

(23) ソゴヤマデ：底やまで：クジラの黒いひげを鋸で引いて 2 本鉛を付ける。イカ竿のように 2 尺位に 2 本ついだ。

☛「スコーシ　オキサ　エッテガラ　ダンダントレナグナレバノ　ソゴヤマデテノ　ツカタモンダ。（少し　沖に　行ってから　だんだん（イカが）獲れなくなればね　底

ヤマデというのを　使ったもんだ。)」

＜石垣 1980: 59＞

(24) モンカ゜：もんが：底釣りの際にハネゴの針に巻くもの。

(25) アケ゜：あげ：針先の形。返しのようなもの。

☛「ヤッパリ　ムガシカラ　ハリサキダラ　エマノハリサギミタイニ　アケ゜ノツイデネー　アフンダカッコニシテ　ヤッタンダベモノ。(やっぱり　昔から　針先なら今の針先のように　あげの付いていない　あのような形にして　やったんだろうねえ。)」

＜石垣 1980: 59＞

(26) ジョロンコ、ジョロコパリ：じょろこ針：イカ釣り用の針。分銅を付けて、針を 5，6 本つけて用いた。

(27) オッパイ：おっぱい：針の種類。詳細は不明。

☛「ダカラ　ジダイニヨッテ　マダ　ホレ　ギョホーモ　カワッテクルシ　ハカドルシコ◦ト　アッタノセー。ソレカラ　マダ　ダンダン　ホレ　アノ　ジョロッコパリダトガ　ソラ　アノ　ナントガ　ハリ　アッタベセー。エマノ　ホレ　オッパイダトガアレー　エマノ　ナントガテ　エッペ　アッタベセー。(だから　時代によって　また　ほれ　漁法も　変わってくるし　はかどる仕事が　あったのさねえ。それからまた　だんだん　ほれ　あの　ジョロッコ針だとか　そら　あの　なんとか　あの針が　あったでしょう。　今の　ほれ　オッパイだとか　あれ　今の　なんとかってたくさん　あったでしょう。)」

＜石垣 1980: 63＞

(28) マンボ：まんぼ：昭和 30 年代初期の漁法。連結トンボ（道縄）でもって、針を 20 本から 30 本付けて、それの重たい分銅を付けて、それを両手に巻きつけてイカを釣る。立って手繰る釣りのやり方がマンボ踊りを連想させるので、この名が付いたと言われている。[11)]

☛「オラドカ゜　ヤルヨニナッテカラ　アレダンダモノー　エヂバンハジメニ　ヤッタノガ　マンボッテンダベセノー。(私たちが　(イカ釣りを）やるようになってからあれなんだもの　一番初めに　やったのが　マンボといっていたんだろうねえ。)」

＜石垣 1980: 63-64＞

(29) テツパリ：てつばり、鉄針：鉛の針に対し、鉄の針。ニホンヤマデからサンボンヤマデになった際に用いられるようになったものか？以下の、カナマギ、ツノバリも同様。

(30) カナマギ：かなまき、金巻：鉛とビニールから成る。

(31) ツノパリ：つのばり、角針：ビニール製の棒の先に付けた針。

(32) テングス：てぐす：イカを釣るときに用いる。明治から昭和初期のものは現在のものほど長くはなく、4 尺位。

(35) ベーク：べーく：イカを巻き上げるときに使うローラー型の釣車。これを用いると船べりから取り込む際のバラシが軽減される。

(36) フボー：ふぼう：現在用いられているイカ釣り用の漁具。素材がやわらかい。
☛「ソレカラ　ベークトカ　フボー　ヤコイデノー。(それから　べーくとか　ふぼう　やわらかいからねえ。)」
＜石垣 1980: 65＞

(37) キカイマギ：きかいまき、(自動) 機械巻き：昭和 55 年現在の釣法。

(38) ママギ：うままき、馬捲き：イカを積んだ船を馬を利用して巻き上げる方法。主に、女たちが浜で担当した。また、沖に張った網を馬で引っ張る漁法。

(39) マギド：まきどう、捲きどう：ロープを付けて船を巻き上げる道具。

(40) コシビギ：こしびき、腰引き：網や船を引く時に、腰に板を当て、手で綱をつかんで引く方法。
☛「アノアダリ　フッパルノ　アミー　ムガシノー　ズーット　ハエヅギノ　ハナシダモノー。ママギダノノー　ソノー　マギド　ナンテ　ツカワネガッタモンダマシ。ホドント　コシビギバリイ。(あの頃　(網を) 引っ張るの　網を　昔の　ずーっと　早い時の　話だもの。馬捲きどの　そのう　捲きどう　なんて　使わなかったもんだよ。ほとんど　腰引きでばかり。)」
＜石垣 1980: 24＞

(41) テカコ◦：てかご、手篭：イカを浜で拾い集める時に用いる篭。
☛「アノーヤキダマジダイ　テカコ◦モテケバ　カワジリガラ　ハマ　アリゲバ　エガニンジューモ　サンジューモ　ヒロテクルエー。(あの焼玉時代には　手篭を持って行けば　川尻から　浜を　歩けば　イカが　20 匹も　30 匹も　拾ってくるよ。)」
＜石垣 1980: 66＞

(42) タズ：たず：イカ寄せのガス灯を安定させるための木、または鉄製の支柱。

(43) アガシ：あがし：灯火、明かり、光。梶を取る人が前方を見えるようにと、イカ釣り船を陸に入れる時には必ずアガシを消した。

イカ釣り用の漁具の変遷は、そのまま漁法の変遷に対応する。「爺ちゃんたち（明治・大正生まれ)」の時代にはイカがいくらでもいたので、ヤマデとハネゴで用が足りた。網をかければ、陸にイカが寄ってきて、履いていたゴム長靴に食いついたという（石垣 1980: 66)。この漁法は漁船が動力船になった後も続いたが､昭和 26 年頃から 1 本の元糸に数十本の擬似針を付け、腕力で操作する漁法がとられ始める（椴法華村史 1989: 294)。ヤマデも 2 本ヤマデから 3 本ヤマデが使われ、針も鉄針からやわらかい角針に変わっていく。マンボなどもこの頃に使用されたのだろう。そして、昭和 50 年代になると、釣ったイカを引き上げるのに自動機械捲きが導入されるのである。

半紙判の大きさのガラスを紙面に敷いて、その中にランプ台を置き、ほや（ランプの覆い）をついだ灯油を燃料とするランプ時代に始まって、ガス灯、アセチレン灯、カーバイトという風にイカ寄せの明かりも変化していった｡カーバイトには真鍮のほやをかけたようである。

3.2 その他の漁具・漁法関係の語彙

イカ釣り関係以外の語彙は、次の通りである。

(44) ハエナワ：はえ縄：1 本の長い元縄に適当な間隔をあけて多くの枝糸を付け、これに釣り針を付けた漁具。タラ釣りは戦前まではえ縄で行い、網は用いなかった。
☛「イマノ　イカツリダトカ　タラツリダトカ　ムカシ　ミンナ　ハエナワデヤッタカラー。イマミタイニノー　アミナンテユーモンワ　ミタクタッテノー　アレダカラノー。(今の　イカ釣りだとか　タラ釣りだとかは　昔は　みんな　はえ縄でやったから。今みたいにねえ　網なんていうものは　見たくたってねえ　あれだからねえ。)」
＜橋本・島田・塩谷 2011＞

(45) テンテンパリ：てんてん針：マス釣用の針。
☛終戦後、7〜10 年くらいまで、相当数のマスが獲れた。毛針は用いず、てんてん針 1 本で釣る。一日 20 本も獲ってくれば大漁だった。
＜石垣 1980: 78-79＞

(46) フクロドリ：ふくろとり、袋取り：11 月、12 月に海に首まで潜って行う漁法。

(47) クヂドリ：くちとり、口取り：袋の口を締めて、魚が陸の方に来ないように閉じ込めてしまう漁法。
☛海中に入って袋の口を締めるのであるが、その担当は特別に選抜された人で、給与手当を多くもらうと同時に、選ばれたこと自体が名誉であるとされた。
＜石垣 1980: 32-33＞。

(48) マネ：まね：合図のために沖で振り回す松明の火。恵山で松の根を採った。

(49) マツプシ：まつぶし、五葉松：松明の材料として用いられる木。

(50) タエマヅ：たいまつ、松明：ナラの木を切って来て、生の間に半分くらいまでマサカリで先を割って用いる。

渡島半島東岸部の沖合ではタラがかなりの量漁獲された。『椴法華村史』(1989: 198）によると、大正 10 年にスケトウダラの動力船によるはえ縄漁が始められた。タラ漁は 10 月から翌年の 1 月にかけて最も盛んであり、渡島半島西岸部の江差や内地からも人が大勢やって来た。椴法華村では漁期の最初から最後まで椴法華沖の漁場に出漁したが、隣村の根田内村（恵山町）では 11 月上旬に椴法華沖、下旬は磯谷沖、12 月は白浜沖、その後は根田内沖というように、漁場を移動した。

イワシ漁業も盛んに行われてきたが、残念ながら、今回の調査ではそれに関連した語彙はあまり収集できなかった。イワシの漁期は夏イワシが 7 月〜9 月、秋イワシが 10 月〜12 月である。明治時代には魚見船である胴船の船首に船頭（センド）が立ち、魚群の行動を探索し魚群を発見するやマネをあげて合図し、直ちに網を引きまわす漁法が行われていた（椴法華村史 1989: 127)。イワシは肥料用の魚粕を製造する原料であるが、これに関連した語彙については稿を改めて紹介したい。

コンブ漁に関しても、言及できるデータが少ない。渡島半島沿岸全域から日高の三石当たりまでが、採取地であり、漁具、製造法などに関係する語彙は豊富であると考えられる。渡島半島東岸部では、マッカ、ネジリという 2 種の漁具が使用されたようであるが、渡島半島西岸部との比較で調査すると興味深い事実が発見できるだろう。

4. 結び

本稿では椴法華村を中心とする渡島半島東岸部の漁船、漁具、漁法に焦点を当てて、関連する語彙、及び事例を 50 ほど記した。椴法華村の漁船の変化スピードが、北陸地方より遅れているばかりか､渡島半島西岸部を含む北海道の他の地域よりも遅い事実が判明した｡また、イカ釣りが盛んなために、これに関連する語彙が豊富であること、漁法に関する語彙を時系列で追っていくと、そのまま漁法の変遷がたどれることも見て取れた。

ここに挙げた語彙が渡島半島東岸部に特有のものであり、他の地域と語形や発音などに違いがあるのかを明らかにするためには、松前、江差を中心とした渡島半島西岸部での実地調査が必要不可欠である。さらに、イカ漁以外の漁、たとえば、タラ漁、イワシ漁、コンブ漁に関わる語彙は、実地調査や文献調査を通じてできるだけ数多くの語彙を収集していかなければならない。その際には、地元の人の言葉でまとまった文脈の形で記録することが肝要である。語彙調査は談話調査に基づいて行う。それによって初めて生活に支えられた語彙の生態を正しく捉えることが可能となるからである。

謝辞

* 本調査研究は、平成 23 年度科学研究費補助金（課題番号：23520540）の交付を受けて行われた「旧椴法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」における研究成果の一部を公にしたものである。現地調査をするにあたって様々な面で協力して下さった共同研究者の塩谷亨氏と島田武氏に、深く感謝申し上げたい。また、貴重な資料と情報を提供してくださった戸井郷土館、及び意見と助言を寄せてくださった 2 名の査読委員の方に謝意を表したい。もちろん、本稿の誤り等の責任は著者ひとりに帰すものである。

注

1) 両町とも椴法華村と同じく、2004（平成 16）年 12 月に函館市に編入された。

2) 2000（平成 12）年、室蘭工業大学 CRD センタープレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」。この調査が、平成 23 年度文部科学省科学研究助成金基盤研究 C「旧椴法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」（課題番号：23520540）に引き継がれている。

3) 恵山町、椴法華村、南茅部町を含む地域を指す。

4) 以降の表記の仕方は、次の通りである。
方言表記（カタカナ）：標準語表記（ひらがな／漢字）：意味・用法の解説
参考として用例や背景説明を付す場合があるが、その際には“☛”で表す。

5) 「川崎船」の名前の由来は、はっきりしない。『新高島町史（デジタル版)』には、小樽博物館からの聞き取り調査によるとことわった上で、「川崎船とはかわさき衆（河口に住み舟で漁を行う集団）が乗る

船のこと」であると説明している。

6) 写真 1〜3 は、2011（平成 23）年 9 月 8 日に、青森市のみちのく北方漁船博物館(http://www.mtwbm.com)で塩谷亨氏が撮影したものである。この博物館には、津軽海峡両岸で用いられた木造漁船約 200 隻が展示されている。

7) 大正 3 年 3 月、日魯漁業は函館に設立された。それ以後、椴法華村内より日魯漁業に雇われ、カムチャツカ方面に出稼ぎに行く者が出た（椴法華村史 1989: 182）。

8) カ行音文字の右上の“◦”は鼻濁音を表す。

9) 山田（2005）には 30 隻分の詳細な手書きの和船図が描かれている。みちのく銀行事業「和形漁船収集計画（100 隻）」の一環として、平成 8（1996）年に道南部で収集された和船（ムダマはぎ船）を、船大工であった山田佑平氏が 1 隻ごとに丁寧にスケッチした図録集である。今後の和形漁船の研究にとって貴重な資料と言える。

10) 東北歴史博物館のアドレスは、次の通りである。http://www.thm.pref.miyagi.jp/

11) 「マンボ」も含めて、イカ釣り漁法の詳細については、福島徹男著「佐渡島いか釣り漁法の史的考察」（上）『佐渡史学・第 9 集』（1973（昭和 48）年 10 月号）参照のこと。なお、本文の「マンボ」の項目の後半部は、http://www.scr-jp.com/forum/culture/jiten1.html から引用した。

参考文献

石垣福雄 (1980) 『北海道（昭和 55 年度）各地方言収集緊急調査　文字化原稿：椴法華村』「1. いわし漁全盛のころ；2. 椴法華の祭り；3. いかつり漁法の今昔；4. 漁船の変化；5. 漁業後継者の問題」1-89（通しページ）, 未公刊原稿

_____ (1983) 『北海道方言辞典』　北海道新聞社

北の生活文庫企画編集会議（編） (1999) 『北海道のことば』　北海道新聞社

高島郷土館　『新高島町史』 http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/r51t0105.html, 2011 年 11 月 29 日閲覧

淡斎如水 (1848) 「松前方言考」　北の生活文庫企画編集会議（編）『北海道のことば』, 176-211

椴法華村（編） (1989) 『椴法華村史』 ぎょうせい

函館市　「造船業の推移」 『函館市史デジタル版』 http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soum/hensan/hakodateshishi/, 474-479, 2011 年 11 月 29 日閲覧

橋本邦彦 (2011) 「椴法華の方言語彙について」 『北海道言語文化研究』第 9 号, 115-124

橋本邦彦・島田武・塩谷亨 (2011) 「椴法華の漁業について」　『室蘭工業大学紀要』第 61 号　（印刷中）

山田佑平 (2005) 『道南の磯船』　自費出版

類家直人（編）(2007) 『復刻版松前古老百話・白神』 松前古老百話・白神復刻実行委員会

執筆者紹介

氏名：橋本邦彦
所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域
Email：92hashimot@gmail.com